リビングのソファに深く体を沈め、里奈は膝の上で封筒を握りしめていた。
六年生に上がって間もない十二歳。
キャラクターもののデザインが施された短めのTシャツが胸元でわずかに息苦しく上下して、母の真似をして買ってもらったばかりのタイト目なジーンズが柔らかく皺を寄せている。
セミロングの黒髪が頬に張り付き、学校から帰ってきたばかりの里奈の身体は、汗で少し湿った肌にまとわりついていた。

カーテンの細い隙間から、オレンジ色の柔らかな光が部屋の床に長く伸び、静かな影を落としていた。
反して、里奈が持つ封筒の紙質が指先に冷たく感じられ、無意識にその端を何度も折り曲げていた。

「はあ……きちゃった……」

手紙の内容は、事務的で感情を一切感じさせない冷たい文面だった。里奈は震える指でその紙を広げ、何度も同じ箇所を読み返した。
出生率向上を目的とした国家的大規模実験の一環として、未婚の若年者を対象にした「強制カップル化プログラム」が、正式に本格始動した旨が記されていた。
政府は人口減少対策として、対象者一人ひとりにランダムでパートナーを割り当て、一定期間内に妊娠・出産を義務づけるという内容だ。
拒否した場合の罰則についても、淡々と但し書きが並んでいる。

そして、最も衝撃的な一文。
里奈に割り当てられた相手は、顔も名前も知らない四十代後半の男性であること。
職業、居住地、家族構成までが簡潔に記載され、写真が同封されているはずだと注意書きまで添えられていた。

里奈の母親である美咲は三十六歳。
不安そうな面持ちで娘の隣に腰を下ろし、封筒をもう一度読み返しながら眉を寄せた。
優しい目元に深いしわが刻まれ、心配そうに里奈の肩を抱く。

「里奈……こんなの受け入れられないわよね」

里奈は小さく頷いた。
胸の内側でざわつく感情を、言葉にしようと何度も口を開けては閉じる。

真面目で目立つタイプではない彼女は、クラスでは友達と他愛ないおしゃべりを楽しむ程度。
ミニバスケットボール部に所属しているものの、目立つ活躍をするわけでもなく、ただコートを走り回るのが好きだった。

最近、つい夜のベッドの中で自分の指を這わせるようになってしまった。
義務教育で習った薄い性知識しか持たないはずなのに、身体の奥底から込み上げる疼くような感覚に、どうしようもなく戸惑っていた。
指先が敏感な部分に触れるたび、下着のクロッチがじっとりと湿り気を帯び、朝になってその痕跡を見るたびに胸が締め付けられるような罪悪感を覚える。

きっかけは、遊び半分のぬいぐるみ遊びからだった。
小さなぬいぐるみの鼻先をおまんこにそっと押し当てたとき、クリトリスが擦れる感覚に思わず息を飲んだ。
予想外の甘い刺激に目を見開き、それ以来、母親の目を盗んでは何度も繰り返すようになった。
部屋のドアを軽く閉め、ベッドに仰向けになると、ぬいぐるみを太ももの間に挟み、こしゅこしゅと腰を小さく動かす。
柔らかい鼻先がクリトリスを執拗に刺激するたび、背筋に甘い痺れが走り、時には全身を小刻みに震わせながら絶頂を迎えることもあった。
それでも里奈は、これが特別に悪いことだとは思っていなかった。
終わった後はケロッとした顔でぬいぐるみを元に戻し、勉強机に向かう。

ただ問題は、その後始末だった。
下着のクロッチ部分が黄色く変色したり、白く乾いたシミが残ったりするのだ。
洗濯物を見れば一目瞭然で、母親の美咲はすべて気づいていた。
それでも美咲は成長の一環だと思い何も言わず、ただ静かに新しい下着を用意しておく。
母娘の間には、そんな母娘の間には、そんな暗黙の理解があった。

そんな成長途中の里奈が、見ず知らずの他人――、
しかも四十代後半で、美咲よりも明らかに年上の男性と強制的に結ばれ、結婚し、子を産まされるかもしれない。
そう考えるだけで、胸の奥が冷たく重くなり、吐き気のような嫌悪感がこみ上げてきた。
まだ楽しく学校生活を続けている里奈が、大人でも知らないような相手と一つの布団に寝かされ、夜毎に体を重ねる姿を想像するだけで、背中がぞわぞわと粟立った。

「相手の男性の情報は、来週までに詳細が届くらしいわ。あと、写真も……」

美咲の声が震えた。里奈は唇を噛んでいるだけで何も発しようとはしない。
見ず知らずの大人と、強制的に結ばされ、妊娠・出産を義務づけられる。
拒否すれば罰則が科されるという話も耳にしていた。

二人は長い間、沈黙を共有した。
壁の時計の針が刻む音だけが部屋に響く。
やがて美咲が、意を決したように息を吐いた。

「ねえ里奈。……雄飛くんと、先に子どもを作らない？」
「え……？雄飛くん……？」

その言葉に、里奈の頬が一瞬で熱くなった。
雄飛は、同じ小学校の同級生。幼稚園も一緒で、幼い頃からずっと側にいた存在。
勉強も運動もできて、根は真面目だけど、友だちと一緒にふざけて遊ぶような男の子。
里奈は昔から、密かに想いを寄せていた。
美咲も、それを薄々気づいていたはずだ。

「で、でも……まだ、付き合ってもいないのに……、それに、雄飛の気持ちとか……」
「時間がないのよ。通知が来てから一ヶ月以内に妊娠が確認できないと、プログラムが……罰が、強制執行されるって書いてあるの」
「そ、そんな……一か月以内なんて、もうすぐじゃんか……」
「そうなの。本当に時間がないのよ……。
それに、雄飛くんなら、里奈のことを大切に思ってくれると思うの。
お母さんね、ずっと雄飛くんが、里奈のことを好きだったらな、って思ってたの」
「そうなの……？」

美咲の声は優しく、里奈をこれ以上不安にさせまいとするように穏やかで柔らかかった。
しかし、その奥には揺るぎない決意が確かに宿っていた。

里奈は膝の上で指を強く絡め合わせ、爪が白くなるほど力を込めた。
胸の奥で心臓が激しく脈打ち、耳の奥で自分の鼓動がうるさく響く。
結婚。妊娠。そしてその前に必ず必要になるセックスという行為。

まだ誰ともしたことのない、触れられたことすらない体を、雄飛くん以外の誰かに委ねるかもしれない――。
そう想像しただけで、喉の奥がからからに渇き、胃のあたりが不快に縮こまった。

「そう……だよね。知らないオジサンなんかより、雄飛の方が、好きだもん……」
「うん、里奈……。お母さんは、里奈には幸せになってほしいの」
「お母さん……」

恥ずかしさが頬を熱く染め、指先はまるで氷のように冷え切っていく。
不安が波のように押し寄せては引いていく一方で、雄飛の顔を思い浮かべた瞬間に、胸の奥のどこかで小さな期待の炎がぼうっと灯る。
その矛盾した感情が、ぐるぐると胸の中で渦を巻き、息苦しささえ感じさせた。

もし雄飛と先に結ばれたら、自分は本当に彼のものになれるのだろうか。
まだ恋人同士ですらないのに、こんな形で急に身体を重ねることになるなんて。
里奈は唇をきつく噛み、視線を自分の膝の上に落としたまま、言葉が出てこなかった。

――その日の夜、食卓の片付けが終わった頃、美咲はリビングの電話機の前に座った。
里奈は自分の部屋のドアを少し開けたまま、廊下に漏れる明かりをぼんやりと眺めながら耳を澄ませていた。

美咲の声は静かだが、意思の強いはっきりとしたトーンで雄飛の母親に事情を説明し始めた。
強制カップル化の通知が届いたこと、相手が四十代後半の見知らぬ男性であること、そして里奈がそれをどうしても拒否していること。
電話の向こうで雄飛の母親が息を飲む気配が、微かに聞こえてきた。

「だから……雄飛くんに、明日放課後、うちに来てもらえないかしら。
里奈が直接話したいと言っているの。本当に急で申し訳ないんだけど……」

美咲は丁寧に、切実さを隠さずに言葉を続けた。
里奈はドアの隙間から母親の背中を見つめ、両手をぎゅっと胸の前で握りしめていた。
心臓が不規則に跳ね、喉の奥が苦しくなる。

雄飛がここに来る。

いつものように気軽に遊びに来る顔で、でも今日だけは違う。
電話が切れた後、美咲はゆっくりと振り返り、里奈の視線に気づいて小さく微笑んだ。

「大丈夫よ。雄飛くんのお母さんも理解してくれた。明日、放課後すぐに来てくれるって」

里奈はただ頷くことしかできなかった。
言葉が出てこない。
頭の中では、明日雄飛と顔を合わせた瞬間のことを何度も想像しては、恥ずかしさと緊張で胸がいっぱいになる。
幼い頃からずっと側にいた彼に、こんな形で「助けてほしい」と頼むなんて。
里奈は唇を強く噛み、部屋のドアをそっと閉めてベッドに腰を下ろした。
布団の上で膝を抱え、明日という時間をただ静かに待つしかなかった。

――翌日の放課後、教室の掃除を終えて帰宅したばかりの時間だった。
美咲はあらかじめ外出しており、家の中には里奈しかいなかった。
美咲からは、昨夜きちんと伝えられていた。
「自分の気持ちをちゃんと伝えてから、雄飛くんに告白するの。
そして、プログラムのことは絶対に口にしないで、自然な流れで……里奈がしたいと思うように進めてちょうだい」
――そう言われ、里奈は素直に頷いていた。

里奈はランドセルを置いてすぐに自分の部屋のベッドに腰を下ろし、昨日と同じように膝の上で両手を強く握りしめていた。
掌にじっとりと汗がにじみ、指の関節が白くなるほど力が入っている。
髪を耳にかける仕草も、今日はぎこちない。

里奈の心の準備を待たずして、玄関のチャイムがいつもの軽やかな音で鳴り響いた。
その音に、里奈の肩がびくんと大きく跳ねた。
今日のチャイムは、ただの遊びの合図ではない。
心臓が一瞬で喉のあたりまで跳ね上がり、息が浅くなる。

里奈はゆっくりと立ち上がり、部屋のドアの前で立ち止まった。
恐る恐るドアから顔だけ出すと、いつもの雄飛がそこにはいた。